

ともえ シニアカレッジ

2010 第4回講座

漢詩から学ぶ

“ 「千の風になって」 と 蘇軾 ”

函館漢詩文化会

主宰 山形周文

日 時 : 2011年1月18日(火)

午前10時~11時30分

会 場 : 亀田福祉センター

主催 : 函館生涯学習インストラクターの会

白頭吟から抜粋 唐 劉希夷(六五一〜六七八年)

古人無復洛城東 今人還對落花風 古人復た 洛城の東に無く、今人 還も對す 落花の風。
年年歲歲花相似 歲歲年年人不同 年年歲歲 花相ひ似たり、歲歲年年人同じからず。

蘇軾の「前赤壁の賦」と「千の風になつて」

「前赤壁賦」からの抜粋

蘇子曰客亦知夫水與月乎 蘇子曰く、客も亦た夫の水與月とを知る乎。

逝者如斯而未嘗往也 逝く者は斯くの如きか、而かも未だ嘗て往かざる也。

盈虚者如彼而卒莫消長也 盈虚する者彼の如くにして、而かも卒に消長すること莫き也。

中略

則物與我皆無盡也 則ち、物與我と皆 盡くる無き也。

後略

蘇東坡(一〇三六年〜一一〇一年) 北宋時代第一の詩人・政治家・書家。名は軾。字は瞻。東坡居士と号したので、蘇東坡とも呼ばれる。「軾」とは車の前に付く横木のこと。車上で敬礼する時に、両手を掛けて身を屈めるための横木。軾がなければ車は完全なものにはならないため、父の蘇洵が命名した。弟は蘇轍。轍とは車の「わだち」のこと。世の中の人は皆その上を辿っていくことから命名した。この父子三人は『眉山(四川省の三蘇)』と尊敬された宋代の文章家。中でも蘇東坡は中国文学史上有数の詩人であり、文豪である。号の『東坡』または『東坡居士』とは「東の堤、又は東の丘」という意味である。

蘇東坡は新党と旧党の政争に敗れ、朝政を誹謗したという理由で、危うく死刑になりそうになる。刑一等を減ぜられて、流罪になる。流罪先の『黄州』で開墾した土地を東坡と名付けて自らの号とした。六十三歳の時に海南島まで流される。しかし、そこでも詩作を楽しんだ他、グルメとして日々を送る。

豚の角煮の中華料理「東坡肉」(トシポロ)とろ火で柔らかく仕上げる豚の角煮は『黄州』に左遷された際に創した。

『蘇軾の「赤壁の賦」と「千の風になって」』

蘇軾は「壬戌之秋七月既望きんせつ」すなわち、元豊五年（一〇八二年）十六夜（陰曆七月一六日）、友人と長江に小舟を浮かべ、赤壁の下に遊び、「前赤壁賦」を詠んだ。友人は滾々と流れ去る水と水面に映る月とを見て、そのかみの、魏・呉・蜀 三国の赤壁の戦いを想い、人の世の無情さを詠嘆し、また我が生の儂さをも悲しむ。そして、笛の音に思いを込め「悲風に託す」と結ぶ。

蘇軾は、川の水は流れ去って往くが、決して往つたきりなくなるものではない。空の月もあのように満ちたり欠けたりするが、決して消えて無くなるものではない。物も自分も尽きてなくなったりはしない、と詠う。死んでも生きているという解脱でしようか。

それを聞いた客の友人は喜んで笑い、二人は盃を重ねたとのことです。

悲観的な無常観に囚われている客人。それに対して蘇軾は無常を一面の真理ではあるが、見方を変えれば不変であり、絶対であり、無限であるともいえるとの楽観論を披瀝します。蘇軾と客人の哲学問答は夜が白むまで続けられ、やがて客人も蘇軾の考えに共鳴して、おだやかな気持ちになっていきます。

形あるものは必ず滅びるとすれば、自分が生まれてきたことにいったいどれほどの価値があるのだろうか。この世に真理といえるものはあるのか。人類普遍のテーマとして詠み継がれるでしょう。

さて、皆様はどのようにお考えでしょう。